

巻頭言

国際化する病院と図書館

高山赤十字病院 副院長・図書館委員会委員長
竹中勝信

図書館（としょかん）は、中国語の繁体字では、圖書館、簡体字では图书馆と表記されます。ピンインでは túshūguǎn（日本語発音；としょがん、抑揚があります）と発音されます。よく似てますよね。私が、数年前に覚えた中国語です。

さて、話は26歳の駆け出しのある研修医に移ります。彼は2週間の米国、ジョーンズ・ホプキンス大学医学部附属病院（Johns Hopkins Hospital）への研修の機会を勝ち取りました。到着後に彼は、大学・病院の伝統と大きさに圧倒され、巨大な図書館と図書室に衝撃を受けました。今も脳裏に焼き付き、時々夢の中に現れます。それは、莫大な冊数を誇る蔵書（世界中の本と雑誌）、本以外の音声やスライドなどの教育資料（自主学習が可能な環境）や多種の新聞、多数の図書館職員とボランティアの数（いったい何人いたのか？）、図書館は24時間の利用が可能で、そこには、さまざまな国籍の医療関係者など（学生も）が利用している状況に、島国からやって来た彼は数時間、夢中となりそこから離れる事ができませんでした。

あれから30年、日本も地域も病院もグロー

バルになろうとしているなーと、感慨ひとしおです。

ここ飛騨高山、増え続ける訪日外国人観光客には驚きです。2015年3月14日に北陸新幹線が金沢まで延伸開通、杉原千畝記念館の人気、映画「君の名は」の海外上映、2016年12月に高山・古川祭りがユネスコ無形文化遺産へ登録されたことなどにより外国人観光客が急増し、訪日外国人総数は、東京、大阪、京都などの大都市には、はるかに及ばないものの、高山市の訪日外国人観光客の宿泊者（年間45万人）は、人口が90,813人（高山市HP、2015年12月1日現在）から考えると約5倍と日本のナンバーワンに躍り出ました。地域の中核病院・3次救急病院である当院では、訪日外国人の受診者数は右肩上がりです。2016年度の訪日外国人観光客の受診者数は、34カ国、344人（内、入院患者数は11人）、年齢構成は0才から89才に及びました。2016年度の国別（地域を含む）の受診者数は、1位 中華人民共和国（58人）、2位 オーストラリア（35人）、3位 香港（34人）、4位 台湾（中華民国）（31人）、5位 アメリカ合衆国（27人）でした。

国際化を余儀なくさせられている当院では、観光客や患者さんの国際化だけではありません。研修医を高山市の姉妹都市である米国・デンバー市にあるコロラド州立大学病院へ短期の

TAKENAKA Katsunobu
takenakaka@mbm.nifty.com

研修に出しています。また3年前より、高山市の姉妹都市である中国・雲南省・麗江市にあります人民病院の若手医師（卒後5～7年をめど）の臨床訓練も引き受けることになりました。これは、自治体職員協力交流事業（総務省；海外の自治体職員が、日本語または英語の語学力を持ち、1ヶ月間の自治体による研修を経て、自治体の職員として、協力及び交流を行うもの）と外国人臨床修練制度（厚生労働省；外国の医師免許取得後、3年以上の診療経験を有して、事前に厚生労働省の審査手続きのうえ、選定された指導医師のもとで、2年以内の臨床修練ができる）の2つの制度を当院と高山市役所とで創造した賜物です。2015年7月から麗江市人民病院の消化器内科 李国荣 (Li Guorong) 先生、2016年7月 脳神経外科の趙振新 (Zhao Zhenxin) 先生、2017年7月 小児科の翟思 (Zhai Si) 先生をお迎えして、各々約1年間の研修が継続しています。彼らには、専門分野での研修に加え、日本の医療事情、高山の文化や地域医療の事、医療を含めた文化を研修してほしいと、多職種のチームを組んで進めています。また、英語がうまく話せない中国系（中華人民共和国、台湾や香港、マレーシアなど）の患者さんが突然に受診をされた時には医師や看護師、スタッフとの医療通訳もお願いしています。

一昨年、私は彼らの働いている麗江市人民病院に訪問をしてきました。その時の経験から、彼らの研修オリエンテーションには、必ず、図書室のことを盛り込んでいます。当院の図書室では、専門職員の在の中の下、世界中の文献が手に入る事、ネットでの検索に制限や操作の介入のないこと、24時間の図書室の利用が可能な事などを説明させてもらっています。このことは、30年まえの若き日にうけた米国での衝撃体験に基づいているわけです。

当院は、ジョーンズ・ホプキンス大学病院のような巨大で、国際色豊かで、世界中の蔵書が備わっている図書館（図書室）ではありませんが、夢は大きく、常に広い世界を見つめて、文字と知恵を通じた人の交流や医の知（命）の創造の場となる図書室を心がけています。中国からの若い彼らに、この思いが伝わればいいなと思っております。当院での彼らの研修報告を高山赤十字病院紀要に掲載しています。是非、彼らの寄稿文^{1), 2)}をお読みいただきたいと思います。

また、当院がチームで取り組んでいます外国人患者さんへの診療記録をまとめた本が発刊されました³⁾ (図1)。こちらを一読頂ければ幸いです。



図1 外国人患者対応マニュアル

参考文献

- 1) 李国荣. Sincerity, Smile and Service- Japanese Red Cross Takayama Hospital Training Experience-. 高山赤十字病院紀要. 2015; 39: 31-34.
- 2) 趙振新. 高山赤十字病院研修の感想. 高山赤十字病院紀要. 2017; 41: in press.
- 3) 竹中勝信編. 医療現場ですぐに役立つ外国人患者対応マニュアル. 東京: メジカルビュー社; 2017.